

狸囃子

泉鏡花作

全一章

はじめて其名を知りしはと、言出づるほどのものにもあらず。母上いまそかりし時、針箱のあたりに取散らされたる葛飾譚に、本所なる七不思議の、おいて堀、片葉の蘆、送提灯などある中に、狸囃子といへるがあり。囃子といふもおもしろし、狸とあるがをかしとて、幼き耳に覚えしが、如何なるものとも知らず、目のきよろりとして口の先の尖りたる先生が、ぼん／＼と腹鼓を打つなるべしとのみ思ひなしつ。

一昨々年の夏のはじめ、明日は庚申といふに、柴又へ詣でむと、其の心構して、朝疾くと思ふなれば、又不斷の、寝忘れては詮なしと、夜を徹したることありけり。大塚に住みたる頃なりしが、蛙の聲も耳に馴れては能くも聞えず、きヨ／＼と鳴くは時鳥か、覺束なし。向ひの原なる農学校の奥に、乳求めて犢

の鳴くが、寂寞たる夜陰を貫く。ものゝ二時にやならむ、音羽の通、鼠坂の下あたり、豆太鼓を打つ音す。絶えては響き、聞えては止むが、心着けば此の響今はじまりたるにはあらず、初夜過ぐる頃よりなりしを、物に紛れたるにこそ。

耳を澄ませば、題目に合して鳴らす、其よ、彼の幼きものが、「一貫三百何うでもよい、」と突込みて囃す調子なり。

然りながら、處も定めず、或は今いふ其の音羽のあたりと思ふに、遙に佛橋のあるあたりか、あらず、高田の馬場邊か、否、石切橋の最寄にや、やがては大塚の通を眞直に、板橋街道を此方に近づく氣勢すなり。其の状恰も汐のさしひきあるが如し。詮ずるに、あるがまゝの風に乗りつゝ漾ふらむ、調子も物に觸れては亂るゝなるべし。判然とはせず、定りたる音にはあらざりしが、這は彼の處々の講中の、夜を籠めつゝ柴又に詣づるが、幾組も間を措かず、大路小路を練るならずや。さては家の周圍二三町が程こそあれ、傳通院あたりまで行かば、三々五々同行

の衆に逢ふなるべし、をかし、明くるを待つことかは、と茶着にして支度を調べ、其まゝ雪踏穿にて立いでしに、樹立深き中の家にこそ、おもては早や人顔も分つべかりしに、富坂を下り、向うを上りつゝ、本郷の通りに出づるまで、人の影にも逢はず。幻か、あらぬかと見るは、東雲に光黄なる提灯點けたるまゝ、露を寒み辻に踞まれる夜なしの車夫のみなりしが、大江戸八百八町といふ今はた其にも増したり、太鼓打つ講中はいづれを行かむもまゝなるべし。大塚より出づるものと同道筋のみかはと、敢て意となさず。其後折に觸れて思ひ出づる深夜には、必ず件の太鼓の音するが、夜毎なれば、日を経るに従うて、次第に心留むるやうになりて、怪しと思ふに、益々怪しうなり増りぬ。

恚くて一友に會せし冬の夜のしと、雨に、其事語り出でたれば、其こそ、江戸紫昌記の出來たる頃も、今も絶えざる狸囃子よ、となむ教へける。

なほ其の友、嘗て根岸に住みたるに、申す如き怪しの樂、上野の森に起ること連夜なれば、起き出

で、奴が樂屋の様子見むとあさりしこともありし由。

本所には限らずと覺ゆ。大塚を越して、今の榎町にても、同じく聞ゆ。彌生の頃は春の夜のものゝけはび何となうさんざめいて、御すさみ餘り盛ならず。

青葉の頃よりして、夏の夜、秋に入れば、ボンノ様愈々冴えて、隊長大得意を顯すなり。

音も人の心によりて違へり。彼の時は庚申のことありしより法幸の太鼓とや聞かれけむ。今日は演習のありつるよなど思ふ時は、奏樂つるべ撃つ大砲の筈の如く、恰も太平記の初巻を讀み居れば、瀬多の長橋とゞろ／＼と蹈鳴らすも慙くやと聞ゆる。されば酒なく美人なき夜は、机の上に頬杖して、狸的が又やつてるぜ、と人知れずこそ微笑まるれ。

【完】